

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：20103

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26580074

研究課題名(和文)場の言語学の構築：場と意味の創発

研究課題名(英文)Linguistics of 'Ba': Emergence of Meaning in Ba

研究代表者

片桐 恭弘 (KATAGIRI, YASUHIRO)

公立はこだて未来大学・システム情報科学部・学長

研究者番号：60374097

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、日常言語使用の文脈依存性を理論的に把握する新しい手法として、これまで生物・物理学分野において局所的構造・現象と大域的構造・現象との相互作用を記述する目的で提唱されてきた「場」の概念を言語に適用し、従来の個体中心の語用論理論とは異なる着想に基づく言語理論構築を目的とした。従来の文脈理論の批判的吟味と異言語・異文化対話コーパス分析に基づいて「場」を言語使用を規定する社会集団に固有の情動的・社会的な規範制約と位置付け、発話と場との相互作用を「場」のわかまえと「場」の動的構築の両方向的作用と捉えることを提案した。

研究成果の概要(英文)：This research was conceived on the idea to develop a novel theory on context-dependency in ordinary language use, by applying and extending the idea of 'Ba' (field), which is originally developed in the fields of physical and biological sciences to capture the interaction between local and global structures and phenomena. Based on cross-linguistic and cross-cultural analyses of dialogue interactions, together with a critical examination of conventional pragmatics theories, we proposed a picture of 'Ba' as a bundle of social norms and informational constraints implicit but shared by the participants in the situations of conversation. 'Wakimae' and dynamic construction are identified as two-way mechanisms that play central roles in the interaction between 'Ba' and utterances.

研究分野：言語学

キーワード：語用論 場のわかまえ 場の動的構築

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19(共通)

1. 研究開始当初の背景

日常言語の使用は高度に文脈依存的である。文脈依存性の理論化はこれまで言語学の中でも語用論分野を中心として進められてきたが、話者の時空間位置(indexical), 行為遂行(speech act), 解釈推論(implicature)など、いずれも文脈を言語使用者個人に関与する要因として把握・定式化が行われてきた。しかし文脈依存性には、敬語使用に代表される対人関係調整や Thai 語の Maipenrai 用法に見られるように、言語使用者の所属する社会集団の社会規範・文化が言語行動を規定するという側面が存在する。井出[1]は社会集団の規範性を踏まえた言語使用の様態をとらえるために「わかまえ」概念を提唱している。

一方、生物・物理科学分野では、局所的構造・現象と大域的構造・現象との相互作用を記述するために「場」の概念が提唱され、集合的な秩序生成や分散的な最適化制御が議論されている[2][3]。

提案者は、状況意味論による日本語現象の理論化、対話コーパスに基づく対話インタラクション現象の実証的研究を通じて、日本語を含むアジア言語では社会集団固有の規範や価値感の影響が強いこと、それら言語行動の説明には個体中心の語用論理論とは異なる発想が必要なことに気づき「場」概念の発展的適用の可能性を着想した。

[1] 井出祥子, わかまえの語用論, 大修館書店, 2006.

[2] 清水博, 場と共創, NTT 出版, 2000.

[3] Nakagaki, T., et. al., Rules for biologically-inspired adaptive network design, Science, 2010.

2. 研究の目的

日常言語の使用は高度に文脈依存的である。文脈依存性は、主体としての話者の発話生成・解釈を規定する時空間、認知的、言語的要因のみに限定されず、言語使用者の所属集団に固有の社会規範・文化・価値が言語行動を規定するという側面も存在する。本研究は、生物・物理科学分野で局所的構造・現象と大域的構造・現象との相互作用を記述するために提案された「場」概念を出発点として、言語使用を規定する社会的・情動的制約を「場」ととらえる新しい言語理論を開発することを目的とした。

3. 研究の方法

(1)『場の理論』と『場の言語学』の架橋:

清水博らの提唱する「場の理論」と本研究課題で取り上げる「場の言語学」における「場」の概念の共通点と相違点を検討し、両者を架橋する方向を模索する。場の理論の研究者を招聘した研究集会を開催し、言語学への適用を想定した場概念の精緻化を進める。場に関与すると考えられる言語現象として、

敬語、呼称/人称代名詞使用、終助詞などがこれまで散発的に言及されてきているが、言語学における「場」概念確立のために対象とすべき言語現象の網羅的検討を行う。

(2)『場の意味論』の構築

場の理論と言語意味論との対峙を通じて「場」概念に基づく「場の意味論」構築を企図する。論理的真偽と可能世界を基盤とする形式意味論と人間の言語的認知特性を基盤とする認知意味論の概念・理論装置を出発点として、主に日本語の現象を題材として、情動的・社会的「場」の概念と言語表現意味との関係記述の理論を検討する。日本語および韓国語の複合名詞および名詞-名詞修飾の意味論・語用論、日本語およびヨーロッパ諸欧語における敬語・人称使用に関わる概念検討などを想定している。言語意味論研究者を招聘し、形式意味論における主観的判断への最近の理論展開に関する理解共有と、場の言語学からのアプローチをテーマとして研究集会を開催する。

(3)『場の語用論』の構築

日本語・韓国語・英語などのコーパスを用いて現実の言語使用場面における「場」現象調査を行い、「場の語用論」構築を企図する。言語的「場」の構成要素となるアイデンティティ、社会的役割、行動規範・慣習などの社会的制度・装置は社会的現実として外在すると同時に、個々の言語使用者がそれらを内化することを通じて具体的言語使用として表出される。そして言語的インタラクションを通じて社会的現実が動的に遷移する。言語的「場」の言語行動への表出や動的遷移の様態は社会集団ごとの個別性・文化依存性を有する。このような現象はこれまで、前提の accommodation, 指標表現の創造的使用, interactive alignment のように、語用論的現象として個別に取り扱われてきた。「場」概念を用いてこれら一群の現象を統一的に扱うことによって、「場の語用論」構築を目指す。

言語・社会関連の具体的現象に関する研究の発表と場概念による理解をテーマとして国際研究集会を開催して議論を深める。

4. 研究成果

場の言語学に関する国際研究集会を4回開催して理論言語学、言語人類学、社会言語学、コーパス言語学、情報科学、英語教育など多様な専門分野の研究者による討議を行い、場の概念の明確化、言語現象への適用の可能性、語用論理論としての展開などに関して検討を行った。

- 5th International Workshop on Linguistics of 'Ba', Waseda University, 2017/12/15-17

- 4th International Workshop on Linguistics of 'Ba', Waseda University, 2016/12/16-17

- 3rd International Workshop on Linguistics of 'Ba', Waseda University, 2016/3/26-27
- 2nd International Workshop on Linguistics of 'Ba', Future University Hakodate, 2015/7/4-5

また国際語用論学会での発表, Paris で開かれた文脈に関する国際コロキウムでの招待講演および討論を通じて「場」概念の発展を図った。

(1) 『場の理論』と『場の言語学』の架橋:

清水博による主に物理化学領域の現象から発想された「場」概念と、仏教・武道における「無」「間」概念、指標性などの言語現象の検討から、「場」概念を捉えるためには原初的な場、言語活動を取り巻く場、理論化によって記述される場の三階層を設定することが有効であるという提案が得られた。

(2) 『場の意味論』の構築

形式意味論, 認知意味論との対比および日本語・韓国語の複合名詞および名詞-名詞修飾の意味論・語用論, 日本語および英語の語用論的現象の検討から, 場の影響は日本語の表現使用や日本文化に典型的に見られるが, 必ずしも日本・日本語のみに限定されるわけではなく, 世界的に普遍性を備えた基礎概念であることを確認した。

(3) 『場の語用論』の構築

日本語・英語・中国語・アラビア語の言語インタラクションコーパスの異言語比較分析を通じて, 図1, 図2に示すように言語インタラクションの「場」を発話参加者を取り巻く社会的慣習・規約を含む文脈的情報であって, わきまえを通じて話者の発話行動を規定すると同時に場の参加者が動的に維持構築する存在として提示した。そのアイデアに基づいて, 日本語・中国語・アラビア語の会話主導の社会的依存性に関する分析を提示した。さらに, 共有意図など共同性を支える心的要素の理論と「場」概念との関連性について考察と討議を行った。

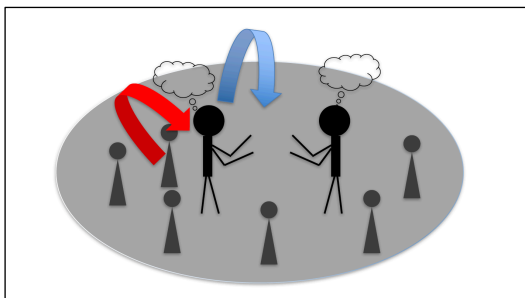


図1. 言語インタラクションの場の概念

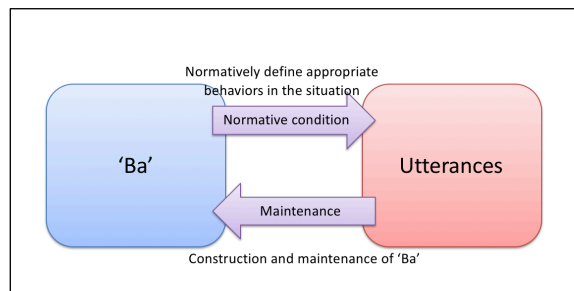


図2. 場と発話の相互作用

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計 8 件)

- ① 片桐恭弘, 対話による場の共創: 確認表現の使用と主導, 日本語用論学会, 2017年12月16-17日.
- ② Yasuhiro Katagiri, Collective agency in 'Ba', Fyssen Colloquium 'Translation, Multimodal Interaction and Context: Cross-disciplinary Perspectives (招待講演)', Paris, France, 2017年10月12-14日.
- ③ Yasuhiro Katagiri, Yusuke Mochizuki, Mayouf Ali Mayouf, Static and Dynamic Manifestations of 'Ba' in Agreement-Seeking Dialogues, 15th International Pragmatics Conference (IPrA2017), Belfast, Northern Ireland, 2017年7月16-21日.
- ④ Yasuhiro Katagiri, Collective agency in 'Ba', 4th International Workshop on Linguistics of 'Ba', Waseda University, 2016年12月16-17日.
- ⑤ Yasuhiro Katagiri, Future is not yet Invented, Innovation and Excellence Lecture, University of Stirling, UK, 2016年11月23日.
- ⑥ Yasuhiro Katagiri, Exploring Linguistics of 'Ba', 3rd International Workshop on Linguistics of 'Ba', Waseda University, 2016年3月26-27日.
- ⑦ 片桐恭弘, 動的対話相互行為としての文化理解, 社会言語科学会第37回研究大会シンポジウム (招待講演), 日本大学, 2016年03月18日.
- ⑧ Yasuhiro Katagiri, Toward Linguistics of 'Ba', 2nd International Workshop on Linguistics of 'Ba', 2015年7月4-5日.

[図書] (計 1 件)

- ① 片桐恭弘, 解放的語用論への挑戦, 対話から見た権威の様態について-能力と敬意-, くろしお出版, pp.157-174, 2014.

6. 研究組織

(1)研究代表者

片桐 恭弘 (KATAGIRI YASUHIRO)
公立はこだて未来大学・システム情報科学
部・学長
研究者番号：60374097

(3)連携研究

井出 祥子 (IDE SACHIKO)
日本女子大学・文学部・名誉教授
研究者番号：60060662

原田 康也 (HARADA YASUNARI)
早稲田大学・法学学術院・教授
研究者番号：80189711

首藤 佐智子 (SHUDO SACHIKO)
早稲田大学・法学学術院・准教授
研究者番号：90409574

吉本 啓 (YOSHIMOTO KEI)
東北大学・高等教育開発推進センター・教授
研究者番号：80189711

阪井 和男 (SAKAI KAZUO)
) 明治大学・法学部・教授
研究者番号：50225752

武黒 麻紀子 (TAKEKURO MAKIKO)
早稲田大学・法学学術院・准教授
研究者番号：80434223

大塚 正之 (OTSUKA MASAYUKI)
早稲田大学・法学学術院・教授
研究者番号：40554051

(3)研究協力者

エレーヌ・プロダルチック
パリ第四 (ソルボンヌ) 大学・理論応用言語
学研究所・所長：フランス

アンドレ・プロダルチック
パリ第四 (ソルボンヌ) 大学・理論応用言語
学研究所・研究員：フランス

スタンリー・ピーターズ (STANLEY PETERS)
スタンフォード大学・名誉教授：米国

Jae-Woong Choe 崔在雄
高麗大学校・言語学科・教授：韓国

前坊香菜子 (MAEBO KANAKO)
一橋大学大学院・博士課程

横森大輔 (YOKOMORI DAISUKE)
九州大学・言語文化研究院・助教

研究者番号：90723990

遠藤智子 (ENDO TOMOKO)
成蹊大学, 国際教育センター, 講師
研究者番号：40724422